ろんだん佐賀

朝長　修さん
ともながクリニック院長

ともなが・おさむ　1960年生まれ。嬉野市（旧嬉野町）出身。鹿島高―長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター（新宿区）を開設。東京女子医科大糖尿病センター非常勤講師。東京都。

東京に暮らして

故郷の良さしみるように

このたび「ろんだん佐賀」の原稿依頼を受けさせて頂きました朝長修です。故郷の新聞に載せて頂くことは私にとって大変うれしく、名誉なことです。お誘いには即答しました。お付き合いをよろしくお願いいたします。

私は1960年生まれ、昨年還暦を迎えました。出生地は福岡市ですが、幼少期をほぼ嬉野町（現嬉野市）で過ごし、高校は地元の鹿島高校です。代々続く開業医の長男であったため、長崎大学の医学部に進学しました。かなりの苦労もあったのですが、1987年に大学を卒業、上京し、東京女子医科大学糖尿病センターに入局しました。

当時、女子医大病院は1日の外来受診者数が日本で一番多い大規模病院でした。目の回るような忙しさの中、糖尿病、特に糖尿病性腎症、腎不全を専門に従事しました。2歳下の弟が実家を継いでくれることになったため、図らずも東京に残ることになりました。指導者にも恵まれて大学には15年在籍し、いろんな業績を伸ばすことができました。

数年の勤務医を経て、2006年に1日の乗降者数が7万人を超えるJR新宿駅から徒歩数分、大都会のど真ん中で自身のクリニックを開業し、現在に至ります。東京生活、新宿区での勤務歴が30年を超えました。

嬉野出身の自分がよもや新宿に根を張って仕事することになるとは夢にも思いませんでした。まったく人生はわからないものです。嬉野では各家庭、電話機の横にバスの時刻表が貼ってありました。時刻表を見て1時間に2本ほどのバスを目的に停留所に向かいました。

高校時代、鹿島には汽車（実際はディーゼルカーですが）の駅があって、ずいぶん都会だなと思ったものです。大学生となり長崎に住むと、バスも路面電車も何本も来るので市内の移動では時刻表を見る必要はなくなりました。東京では電車もひっきりなしに来るので時刻表は全く不必要で、隣の神奈川県、埼玉県まで30分で行けることに驚きました。生活の様式、仕事のスピード感、どちらも自分の人生の中ですっかり変わってしまいました。

しかし都会での生活が長くなると、今まで見えなかった故郷の良さがしみるように感じられました。方言、気質や人情、食べ物や景色が自分の中でとても大切なものとなりました。また都会で生きていくために自分が地方出身者であることをバネにしてきた感もあります。今では佐賀県人であることが誇りで、死ぬまで佐賀県人でいたいと切に願っています。

妻や息子たちには不便で迷惑かもしれませんが、本籍は終生嬉野町で変えるつもりはありません。そんなわたしが故郷や都会のこと、医学や我が国の社会について感じたことを書きつづってみたいと思います。拙文をお許しいただけますようお願いいたします。